

令和8年度第1回秋田県生涯学習センター運営委員会 議事録

期日：令和8年7月15日（水）

時間：10：00 ～ 11：30

会場：生涯学習センター視聴覚室

1 開会

2 所長あいさつ

当センターの運営委員をお引き受けいただき、心より感謝申し上げます。当センターは、本県生涯学習及び社会教育推進の中核機関として、県民の生涯にわたる学習活動を支援するとともに、関係職員の資質向上を図り、市町村及び関係機関・団体との連携・協働による「『学び』と『活動』の橋渡し」に努め、持続可能な地域づくりの実現に寄与することを運営の基本方針としている。我々は、自分たちの使命、そして期待されている役割を忘れることなく、シンクタンク機能、研修・人材育成機能、学習活動・情報発信の3つの機能をネットワーク化してそれぞれの機能において得られた知見を相互に生かし継続的な改良向上を目指していく、いわゆるスパイラルアップの仕組みを大切にしながら頑張っているところである。

この後、担当から昨年度の事業報告と今年度の主な事業計画について説明がある。運営委員の皆様からは今年度のセンターの運営について率直なご意見、ご助言をお願いできればと思っている。なお、昨年度の運営委員会でも情報提供させていただいたが、秋田県ではここ数年来、社会教育施設のあり方について検討が行われてきている。令和8年3月には県施設の再編等に向けた基本方針が定められ、生涯学習センターと青少年交流センター（ユースパル）との機能の集約化も検討されているところである。当方としては、今後の検討の結果がどうなるかに関わらず、これまで同様、事業がスムーズかつ効果的に行われることを目指していくという点については全く変わらないので安心していただきたい。ついては、現在の利用状況や将来の集約化を見据えたご意見を、様々な関係者の皆様からいただきたいと思っており、運営委員の皆様にも率直なご意見をいただければと考えている。お忙しい中とは思いますが何卒ご協力をお願いしたい。

3 出席者自己紹介

4 委員長・副委員長あいさつ

○副委員長

生涯学習奨励員協議会は去年50周年を迎えた。ここで皆様に何を申し上げたら私たちの感謝の思いが伝わるのかなと思うくらい本当にいつもお世話になっている。センターがなくなれば私たち奨励員協議会は本当に困る。是非継続をしていただきたい。先日某新聞のコラムに、野球には現場でのみ味わえる独特な物語があるということが書かれて

いたが、私は今日の運営委員会に来て、対面でやることの大切さみたいなものを感じている。今日も学ばせていただきたい。

○委員長

先月、教職大学院でセンターの研修に参加した方々が大変楽しそうに帰っていったということがあり、このセンターの力や学びの力というものを再確認し、とてもありがたかった。生涯学習センターの事業を何回か見させてもらっているが、学校と家庭、地域、社会教育の部分を全て網羅された活動をしているところはなかなかないといつも感じている。人的ネットワーク、社会的ネットワークを水面下のところで作っているところに非常に感銘を受けており、センターの存在が非常に期待されていると思っている。そういうところから私も学ばせていただきながら運営に携われたらと思っている。

5 案件 生涯学習センターの機能及び事業等のあり方について

(1) 前年度の事業報告と今年度の主な事業計画について

①学習事業チームリーダーより

スライドを使いながら、令和7年度事業報告、令和8年度事業計画について説明

※秋田県生涯学習センターホームページ「2026 事業計画・2025 事業報告」参照

②各担当から

・ 障害者の生涯学習に関する調査研究

障害者の生涯学習に関する実践研究8年目を迎える今年度は、障害者の生涯学習の推進と連携・協働による学びの場作りをテーマとして研究を進めている。昨年度実施したモルック体験交流会が今年度から交流大会となり、8月2日に第1回の大会を開催する。また、12月13日には第7回ボッチャ交流大会も開催予定となっている。ご都合がよろしければ運営委員の皆様にも会場の雰囲気を味わいに足を運んでいただきたい。9月には聴覚障害の疑似体験を通して学ぶアルクベ・イウベ・キクベ in 山王〜デフバージョン〜を、第3回市町村公民館等職員専門研修のプログラムとして実施する。

市町村等の要請に応じて社会教育主事が出向く「地域の学びを支えるプラットフォーム構築事業」では、障害者の生涯学習として今年度は八峰町から4年目のエントリをいただいた。次年度からの町単独での持続可能な事業運営につながるように町の担当者と連携協働しながら支援を行っていききたい。その他にも市町村、学校、障害者支援施設等から多数の要請が来ているので、様々な関係機関と連携・協働を図りながら学びの場作りの拡充に努めていく。

最後に、次の調査研究事業に向けて秋頃から学びの場に関するアンケート調査や聞き取りを実施する予定となっている。特に障害当事者や障害支援施設等が抱える悩みや課題、そして要望等、現状を把握することで今後の調査研究につなげていきたいと考えている。

・ ツドウベースの活用

令和8年度ツドウベース6月利用状況という資料をご覧いただきたい。1番が障害者スポーツスペース、2番が地下ホールの実績である。なお3番には4月からの

利用団体、利用人数を示してあるのでご参照いただきたい。

- ・市町村・公民館等職員専門研修、研究大会

7月22日に第1回市町村・公民館等職員専門研修を実施する。昨年度はボッチャとモルックの体験が中心となった研修だったが、今年度は様々な条件、例えば参加者が車椅子利用者、高齢者、児童といった設定で、本来のスペースが確保できない条件でのコート設営や工夫を参加者に体験していただき、新たな気付きや学びを創出したいと考えている。第2回は防災をテーマにした研修で、8月26日に日本赤十字東北看護大学介護福祉短期大学部の及川真一先生をお招きして、講話や防災グッズの展示、近年の状況に鑑みる体験研修を実施する予定となっている。3回目は「アルクベ、イウベ、キクベ in 山王〜デフバージョン〜」を実施予定である。昨年度の体験会では、聴覚障害当事者の参加がなかったため、今年度は秋田県聴力障害者協会の会長及び事務局長の2名と手話通訳者を交え、当事者の思いを聞く時間も設けて実施するという計画になっている。

- ・家庭教育支援指導者等研修

この研修は、年4回の開催で5月、7月、9月、11月を予定している。5月の第1回では、家庭教育調査の分析と、スクールソーシャルワーカーの佐藤秀一先生による講演を実施した。第2回が7月16日で、「ペアレントトレーニングで学ぶ親と子の幸せな関わり方」というテーマで福島県の「郡山家庭教育を支援する会」の教育相談委員会委員長の圓谷円さんから講演をいただいた上で、実際にペアレントトレーニングも体験してもらう。これらを含めた年間の研修において「修了証交付条件」を満たすと、修了書を年度末に交付するという手順になっている。

- ※ 修了証交付条件

- ・家庭教育支援チームリーダー

- 第1回研修の全日程と第2回から第4回までの研修のうち2つの研修を選択し、全日程を受講し活動報告書を提出

- ・家庭教育支援チームサポーター

- 第1回から第4回までの研修のうち2つの研修を選択し、全日程を受講し研修レポートを提出

- ・オーダーメイド型社会教育主事派遣

先ほどの「市町村・公民館等職員専門研修、研究大会」で説明漏れがあったので補足する。11月の研究大会は、岩手大学の深作拓朗准教授をお招きして地域のつながり作りと子どもの育ちを中心にご講話いただく予定になっている。また、実践研究発表として今年度のセンターの取組を紹介する他、地域課題について協議を行う計画となっている。

オーダーメイド型社会教育主事派遣の説明に移る。チームリーダーの説明にもあったとおり、「地域と学校の連携協働体制充実事業」、「地域の学びを支えるプラットフォーム構築事業」の両事業のもとでオーダーメイド型の社会教育主事派遣を実施している。前者では、昨年度に引き続き横手市にエントリーしていただき、今年度はジュニアリーダーの育成を中心に「熟議」を実施する計画となっている。

また、新規にエントリーをしていただいた三種町では、1回目の打ち合わせを経て、県内の20番目となる家庭教育支援チームが、「みーくる」という名前で発足した。今後はそのチームの活動への助言や伴走支援を行っていく予定でいる。後者の「プラットフォーム構築事業」は、様々な地域課題に対して年5回程度の支援を行う長期型と年2回程度の支援を行う短期型の2つのプランから市町村が選択し、当センターが伴走型支援を行うものである。長期型としては八峰町から要請があり（昨年度の継続）、障害者の生涯学習の場作りに対して支援を行うことになっている。短期型としては、大仙市から「熟議」ファシリテーターの育成についての相談、潟上市からは防災講座の企画運営についての相談をいただいている。いずれにおいても、センターとしての知見を生かしながら、横に並んだ形での伴走型支援を進めていく。

- ・あきたスマートカレッジ

今年度これまで行った講座の中で、特にうれしかったことを中心にお伝えしたい。A 講座（地域の取組学び講座）は、柿を通して秋田のよさについて気付かされた。B 講座（熟議ファシリテーター講座）は、昨年度は青森県と岩手県、今年度は山形県からと、他県からの受講者がいる。C 講座（障害者の生涯学習講座）は、音楽の魅力を感じる時間として幅広い世代の方々が集まってくださったり、障害のある講師の方が手話で自分の思いを伝えてくださったりした。以前、運営委員会でも話題になったが、障害者の生涯学習の一番の理想は障害のある方とない方が、同じ時間に同じ体験をしながら相互理解を深めていくことであり、これが共生社会の実現につながると考えている。D 講座（防災講座）には、町内会長を集め防災講座を開きたいと企画されている方が参加された。防災意識を高めていくということで意味のある講座になったと考えている。F 講座（絵本で広がる新たな教養講座）は、今年度新設したものである。

これらのうち、C 講座（障害者の生涯学習講座）と F 講座（絵本で広がる新たな教養講座）の2つの講座は、申し込まれた方が1人も欠席していない。たくさんの人数ではないのだが、モチベーションの高い方が「必ず受講したい」ということで出席率100%という講座が2つも登場している。センターで報告している合計の人数も大切だが、モチベーションの上がる質の高い講座があるという意味で、今年度は非常に順調に進んでいると感じている。年度末の報告でもまたこの後の講座の様子をお伝えしたい。

- ・展示スペース活用

今年度は6月にマールブルアート教室の生徒作品展を実施した。非常に色取りが鮮やかで、一見プロが作った作品のように思われて、見学した方から「これ販売しているんですか」という声上がるくらい素敵な展示だった。7月は、今年度初めて申し込みがあった川柳表紙展が昨日から始まっているが、絵と川柳のマッチングが非常に素晴らしい展示となっている。その他9月、10月、11月、1月と特別支援学校や市民サービスセンター等の作品を展示する予定である。

- ・総務チームリーダーより

施設の利用状況などについて4点説明する。

1つ目は施設利用人数について。令和7年度の施設利用人数の総計は57,433人。令和6年度と比較して5,201人の減となっている。施設利用人数の減少傾向はコロナ前、令和元年度の施設利用人数である約138,000人をピークに年々減少の一途を辿っている。背景には、単純に利用者の減、登録団体の解散、新規団体の増が少ないことなどが考えられる。

2つ目は施設設備について。当センターは今年度で築46年目となる。経年による施設設備全体の老朽化が著しく、近年維持管理には厳しい対応が続いている。そのような状況の中ではあるが、関係各所のご協力をいただき、令和7年度より継続して空調が不調となっている部屋等にレンタルエアコンを導入することができている。今月末に開催が予定されている、第50回全国高等学校総合文化祭あきた総文2026において、当センターは自然科学部門の会場として使用されることとなっている。そのために当センターとしてはできる限り施設設備の整備に取り組んできた。今後も突発的な事態はあるかもしれないが適切に対応していきたい。

3つ目は熊の目撃情報による貸館対応について。昨年度は11月中旬に当センター付近での熊の目撃情報があったことから、利用時間の短縮や自動ドアを閉鎖するなどの対応を行った。今年度は対応の基準を設け目撃情報があった場合及びある程度の期間の目撃情報がなかった場合について、自動ドアの閉鎖及び閉鎖解除を行っている。なお、今年度は今のところ利用時間の短縮等は行っていない。今後も目撃情報を元に児童会館や図書館と情報を共有して対応していく。

最後に県立社会教育施設のあり方検討の現状について。所長あいさつの中にもあったが、令和8年3月に策定された県立社会教育施設の再編等に向けた基本的な方針において、当センターと青少年交流センターユースパルは機能の集約化などを検討しながらその上で施設の集約化も視野に入れて議論を進めることとなっていた。しかしながらユースパルについては、昨年末の指定管理者の撤退、それに伴って4月からは県直営で運営を再開するなど、状況が激変し、今後のあり方についても当センターへの影響は少なからず生じているところである。一方で実際に利用する方々の意見も重要であることから当センター利用者に対してのアンケート調査を近日中に実施する予定である。様々な変化等の状況に置かれている当センターだが、引き続き利用者の皆様には安心してご利用いただけるように努力していく。

(2) その他（質疑応答）

A委員： たくさんの事業、本当に素晴らしい。スマートカレッジについて質問がある。これだけたくさんのバラエティ豊かな講座をやられていて、一番聞きたいのが、集客をどうやっているのかということ。集客の方法と、今まで効果のあった集客の仕方、ここに周知するとすごく上手くいったとか、どのように工夫されているのかというのを聞きたい。

→ 集客については、学習案内の用紙をどこに配るか（どの場所に重点を置いて配布するか）ここ数年、見直ししながら進めてきている。実際に、利用者の方がどこに行って学習案内を求めているかという傾向をつかみながら適切な所に申し込みができるようなものを配布することに一番気を付けて

いる。また、電子申請が大きな力を発揮していると考える。特別な広告掲載依頼等を行っていない。参加人数は減少傾向だが、参加意識の高い方々に受講していただきたいと考えている。6月末段階の比較では、全講座の申し込み率は去年よりも41%高くなっていた。障害者の生涯学習や防災講座等は口コミにより参加者が増加している傾向がある。中身がよければ参加率が上がるというのはとても励みになる。

副委員長： 新設の絵本講座がとても好評という話だが、学習案内に「New」とあり、パッと見た時にこの見出しに惹かれた。訴える力が強く、いいと思った。私自身、絵本に関して興味があり、疲れた時に絵本を1冊買ってきて見て癒やされることが何回もあった。そういう点でこの講座のセレクトはよかった。1回目の開催状況を知りたい。

→ 正直これだけ感動するのかという、自然に涙が出るような構成のお話だった。私自身2回目が非常に楽しみである。

B委員： 私が関わっている市民塾でも参加者は減少傾向だが、毎回平均40名の方に来ていただいている。講師の選定やテーマによっても集まる人数が全然違って、1回の講座で100名の時もあるし、20名の時もあるが、アンケートを毎回取り、それを参考にしている。各奨励員の活動として先日センターの職員の方々に来ていただいてモルックや卓球バレーを実際に体験させていただき、ありがたいと思っている。是非他の講座もやってみたいと思ったところである。調査研究で、インクルーシブの考え方を中心にして共生社会を求めていくことは素晴らしい取組だと思っている。

調査研究をずっと続けて8年ということだが、今後ずっと障害者の生涯学習を続けていくのか、または別な切り口でやっていくのかというところをお聞きしたい。

所長： 実ははっきり申し上げられないというのが正直なところである。このテーマを取り上げてから8年目になるが、毎年問題点や気づきが新しく出てきて、もう少し深めたいところはある。職員はもともとこの分野の専門家ではなく、特別支援や障害者・障害そのものに関してそれぞれが勉強しながら取り組んでいる。市町村の皆さんの悩みに寄り添うために、自分たちがつまづいた体験も含め、経験したことを実際にお伝えし、それが何かの助けになればいいと思っている。

C委員： 市町村の立場としては、センターの先生方から声を掛けていただくのがとても助かる。「こういうことをしてみたい」と市町村で思っているにもかかわらず業務に追われて踏み出せない。当市でも新しく障害者の生涯学習の取組を始めたばかりだが、それも県の先生方にきっかけを与えていただいてやっと踏み出すことができた。今後も市町村に今までどおり寄り添っていただきたい。ユースパルの件は難しい面があるとは思いますが今のセンターの機能を大事にしていきたい。当市はどうしても遠いので、市民の方がこのセンターに来てスマートカレッジの講座に参加するのは難しい面があるかもしれないが、講座に参加して地区交流センターの生涯学習担当の人に紹介するのは私

の役目としてはできると思った。

当市では公民館がなくなって地区交流センターになったように、今公民館も色々変わってきていると思う。生涯学習講座をどうしていただいいのか悩んでいる市町村もあると聞いているので、是非センターの先生たちと一緒にやっていけたらと思う。

D 委員： 最初の頃のスマートカレッジは、座学で高尚な学問を学ぶような講座が多かったイメージがあり、子どもが賑やかに遊んでいる当館とは異なる雰囲気を感じていたが、最近はセラピー的なものや障害者の生涯学習などの講座も開講していて、児童会館が抱えている問題の解決につながりそうなものが多くあると考えている。私たちは、児童館や児童クラブで働く人たち対象の講習会等も実施しているが、現場の人たちが困難を感じていることの一つが、障害や発達障害の診断をはっきりと受けていない子どもたちやその保護者への対応である。今日、センターの講座や研修の講師のラインナップを拝見して、私たちの講習会等でもお話をしてほしいと感じた魅力的な方たちがたくさんいた。

E 委員： スマートカレッジのことについてお聞きしたい。今年初めて A1 と C3 講座に参加した。A1 はいい話だったが、残念だったのは出席者が半分程度というところで、もっと人が集まればよかったと思った。C3 の「手話を楽しもう」は、以前サークルで学んだことのある手話をこの機会にまた学びたいと思った。ただこの講座はあくまでも基本的なもので手話というものがどういうものかを教えることだった。せっかく講座に出席した方がそこで終わらないで継続してやれるようなシステムを作っていただければいいと思う。講義を受けたらあとは自分でやってくださいということではやった意味がないと思うが、その点について何かお考えはあるか。

→ 手話講座の計画をさせていただいたのは自分である。私自身、2 年前に秋田市の手話講座を受講し手話研究会というサークルに所属している。実際に、あの場の学びだけで終わりがたくないという風に感じられた受講者が何名かいて、講師の先生にご相談していたところ、お声掛けいただき、その手話サークルの活動のご紹介をした。今年度初めての試みだったので改善すべき点はたくさんあったかと思う。1 回という講座にするかもしくは入門編と基礎編というような形で 2 回編成にするという考えもある。また公共施設で許されるのであれば外部のサークルの紹介なども兼ねて、手話の学びだけで終わらないような仕掛け、仕組みというものを構築する必要もあるのではないかと感じた次第である。

副委員長： うちの奨励員協議会で、手話を講座で学んだ後、例会で会員同士で普段から自分で使える手話をやるという取組をしている。「楽しかったね、ありがとう」みたいな感じでやっている。レベルアップの講座も大変いいことだとは思いますが、受講した方が身近なところで使っていくことが身に付くと思う。障害者支援は共有すること自体が大変ためになることだと思うので、先

に立っている方が導いてくださればと思う。私たちのちょっとした成功例だが
挙げさせていただいた。

F 委員： 若い世代が参加できる講座があるといいと思っている。講座はあるのだが
どう誘っていくかに難しさを感じている。昨年度はお子さんを誘った例やセ
ンターの知っている方を誘った例等色々あった。高校生や大学生と学ぶのは
私たちも楽しいし、きっとその参加した学生さんにとっても有意義だと思うの
で、中高大学生が参加して一緒に学べるような機会ができればいいなと思う。
若者を巻き込むというところが持続可能性につながっていくと思うが、なか
なかうまくいかない。もし、センターのほうで工夫していて上手くいっている例
があったら是非教えていただきたい。もう一つ、電子申請がより簡単で便利にな
った。以前は受講者番号を忘れて先に進めなくなったことがあったが、今は
受講者番号入力任意になったので、大変楽になりスムーズに申込ができて
いる。

委員長： 本来、公民館をはじめとする社会教育行政は「市町村主義」と呼ばれるよ
うに、市町村が中心となることが基礎にある。その基礎となる市町村ととも
に歩もうとする動きが生まれていることは県のセンターとして非常に素晴ら
しい取組であり、今後とも是非継続していただきたい。また、公民館のセンタ
ー化を進めている市町村の事例もある。センター化した施設をいかに社会教
育的に活用していくかが重要となる。具体的には、生涯学習センターが取り
組んでいるように、地域づくりに向け、学びを軸とするために施設をどう活
用していくかという視点が求められていると思う。この点において、さらな
る連携が生まれれば、より強固で素晴らしい体制が構築できるのではないか
という感想をもった。

6 所長あいさつ

本日は、ありがとうございました。講座については、現在、各市町村でたくさん企画され
ていたり、オンラインの学びの場もあったりするため、当センターが以前のように多くの講
座を開講する必要はなくなったと考えて、今の数になっている。それぞれの講座については、
受講者の数よりも、本当に学びたい人が参加してくれて、そういった人たちが学んだ内容を
実際に活用したり、周囲の人に伝えたりしてくれることが重要だと考えている。今後も現代
的課題、地域課題の解決に向け、少しでも市町村や県民の皆様の役に立てれば幸いである。

運営委員の皆様のご貴重なご意見に心から感謝し、最後のあいさつとさせていただきます。

7 閉会